

ラオスのこども通信 20号

(2001年3月発行)



「評価会議」2日目、活発なグループ討論が行われた。



「読書推進運動 評価会議」報告

2000年12月15日～18日

赤井朱子

「読書推進運動」は、1990年、国立図書館と教育省が協力し、国家プロジェクトとしてスタート、「2000年までにラオスの全ての小学校に図書箱を」を目標に進められてきました。これまでにどのような成果があったのか？ 読書によって子どもたちはどう変わったのか？ 目標年限である2000年12月、この運動の10年間を振り返り、今後の進め方を考えるための評価会議が開催されました。

開くと本棚になる木製の箱に本を詰めて小学校に届けるこの運動に、当会も1992年から協力。図書袋や学校図書室といった新たなアイデアも取り入れながら、取り組んできました。数字の上では、「何千校に配付した」という結果がありますが、当会は「質」の面でも評価を行う必要があると考えました。そこで今回の会議の開催を呼びかけ、同じくこの事業に継続支援をしてきた、シャンティ国際ボランティア会(SVA)、ユニセフとも協力、国立図書館、教育省と共に準備を重ねてきました。

評価会議は、各県から教育委員会の担当者と学校の先生計48名が参加し、12月15日から18日までの4日間、ヴィエンチャンの国立文化ホール会議室で開催されました。公立学校のカリキ

ュラムの中に「おはなし活動」を取り入れ実践しているというカンボジアからも、教育関係者がゲストとして招かれました。

■ラオス国立図書館長の報告

会議は、国立図書館のコンドゥアン館長の報告から始まりました。

「これまでに図書箱や図書袋を配付した学校は5737校(うちASPBは1332校を支援)、図書室が設置されているのは71校です(うちASPBは54校を支援)。残念ながら、全ての学校に配付するという目標は達成できませんでした。当初6316校だった小学校の数が徐々に増し、現在8140校にまでなっていることもその原因の一つです。

さらに、この5737校すべてが現在も図書を持っているわけではありません。配付の過程でド

ナーの都合で1校に対し重複して配付してしまったり、学校側できちんと管理してもらえず、本や箱がなくなってしまうためです。

当初はなかなか活動の理解を得られず、読み終わったページは破いて親がタバコの巻紙にしてしまったり、ネズミに箱ごと食べられてしまったところもあります。現在では、そのようなことはほとんどありませんが。

担当の先生も生活が苦しく、活動する余裕がありません。先生の経済的自立もこの活動には不可欠です。自分を犠牲にしても活動をする先生がいなければ、この活動は成り立ちません。

読書推進運動の目標は、すべての子どもが本を読む機会を得ることです。今後10年間であと5000箱を配付したいので、NGOのみなさんに支援をお願いしたいと思います。

最終的には図書箱ではなく、全校に図書室を設置したいと思っています。実は、新しく学校を建てる時には必ず図書室を設置するという通達が出ているのですが、予算がなくて必ずしも守られていません。

読書推進運動が活発な学校は教育水準が高いといわれます。もっと教育関係者にこのことを理解してもらい、通達を守るとともに、図書購入の予算についても理解を求めていきたいと思っています。」(要約)

■ASP Bの意見を発表

東京から出席したチャントソンと赤井が、今後の支援の方向について、会の考えを話しました。
<配付数の拡大から活動の質の向上へ>

ASP Bの活動理念は「子どもが自ら情報収集し、自己表現する能力を伸ばし、自らの人生を自ら選び、切り開いていくことを支援する」ことにあります。読書推進運動への協力もその一環として位置付けています。

私たちは学校における読書推進には、次のような発展の5段階があると考えています。

- (1) 図書が設置される (物理的に配られた)。
- (2) 子どもたちが本を利用できるようになる。
- (3) 図書館担当だけでなく、すべての先生にとって本が身近なものになり、本を利用する。

- (4) 公教育 (授業) の中で本が活用される。
- (5) 地域の人々にとって本が身近なものとなり、自立した図書室となる。

ASP Bとしては活動の質の追求に力を注ぎ、(5)の段階をめざしたいと思っています。ASP Bがめざすのは質を高める方向であり、量を増やすことではありません。

まだ図書を配付されていない学校を、数の上で網羅するには資金が必要です。私たちのような小さなNGOではなく、大きな財源のあるところから支援を受ける方が適切だと考えます。そこで私たちは、国際機関や政府開発援助などの資金を、国立図書館や教育省が直接得ることを提案します。そしてASP Bとしては、資金だけではできない、活動の質の向上に取り組みたいと思います。

<図書の補充と人材育成を重視>

今後の支援について次のように考えています。

- (1) 図書の供給 (補充) を重点的に支援し、箱や袋の新規配付の支援は積極的には行わない。

図書なしにこの運動は成り立ちません。本が足りなければ活性化にも限界があり、活動が継続できません。図書を補充してこそ、これまでの配付を無駄にすることなく、質を高めることができるのです。各学校には、質の向上のための自主的な活動を促した上で、図書を提供していきます。

- (2) 人材育成のシステムの確立を支援する。

活動がうまくいかない理由として、配付時にセミナーを受けた担当教諭の異動があげられます。また担当教諭だけでは負担も大きくなります。質の向上のためには、全教員がこの活動を理解し、ノウハウをもつことが重要であると考えます。

そこで、教員養成学校の全生徒を対象とした「読書推進セミナー」を支援します。このシステムが機能することによって、今後教員になる人全員が読書推進運動を理解し、各学校での活動を定着させていくことができるでしょう。(要約)

■グループ討論

各県からの参加者が7つのグループに分かれ、

それぞれ現場の問題点や今後に向けた改善策について話し合いました。

時には、ASPBやSVAの現地スタッフが「何かをしてほしいと要求する前に、問題をどうしたら解決できるのかまず自分たちで話し合っしてほしい」と発言する場面も。活発な意見交換の末、読書推進運動をよりよくするための改善策として、次のような意見やアイデアが出されました。

●人材

・担当教員は、セミナーで学んだノウハウを生徒に伝達し、高学年の子どもにも手伝ってもらうのがよい。異動する時は後任にノウハウを伝授する。

- ・担当教員の訓練が年に2回ぐらい必要。
- ・指導書を作ってほしい。指導書があれば自分たちでも他の人に伝達ができる。

●図書補充

・学校間で団体貸出をして本を巡回させ、読む本の数を少しでも増やす。

- ・市や県に予算をもらえるように働きかける。
- ・地域の人にも理解を得られるようにし、本を買う予算をいろいろなところから調達する。

●システム

- ・学校の時間割に読書の時間を設ける。
- ・エイズや麻薬などいろいろな社会問題のプログラムが行われる時に、読書推進も一緒に行く。
- ・読書推進を監視する委員会が必要。県市の教育委員会すべてに研修をし責任をもたせるべき。

●報告、管理

- ・常に下から上へ報告をする必要がある。そして、毎年レポートを教育省に提出する。
- ・教育監督官が学校を定期的に巡回する際に、読書推進の指導もするとよい。そのため監督官も利用促進セミナーに参加してもらう。

●評価活動

- ・各学校を全部、再調査する必要があるのでは。
- ・県市は毎年、中央では3年ごとに評価会を。
- ・決定権のある人が参加しないと事態は変わらない。指導者レベルの人でも参加を。
- ・教育関係者の会議の際に、必ず読書推進運動

のことも盛り込むようにしてはどうか。

●その他

- ・いい活動をしている学校の表彰や見学。
- ・図書箱は重いので、遠隔地には図書袋を。
- ・中高一貫校には図書館を。

■情報文化省・教育省への提案

最後に会議のまとめとして、情報文化省・教育省に提出する提案項目を作成しました。

- (1)人材育成を重視：各段階でセミナーを行いレベルアップさせる。教育監督官が読書推進の指導もできるよう、研修を実施してほしい。
- (2)カリキュラム化：県の条例で授業のカリキュラムに読書推進を導入してほしい。
- (3)各県に責任者を：各県に読書推進運動の責任者をおき、県知事が代表となってほしい。
- (4)住民参加：地域住民が読書推進運動に参加できるように条件を整えてほしい。

今回の会議では、当初私たちが意図した「評価」とはなりません。何より残念なのは「読書推進運動が子どもにとってどうだったのか」という視点での論議ができなかったことです。

「運動スタート当初の計画は、ただ箱を配ることだった。それからすれば、人材育成や図書補充などを行っている現在の運動は、目標以上のことをしているとも言える。」会議の進行役が語ったこの言葉が、参加者の本音なのかもしれません。

ラオスにおいては、この10年間このような会議が全くなかったことからわかるように、「評価」ということが意識されていませんでした。しかし会議では「これまで評価がどういうことかわかっていなかった。地元に戻ってしっかりと調査したい」という声も聞かれるなど、運動の現場に近い教育関係者が「評価」の重要性を意識し、評価への入口を作ったことは、今回の会議の成果と言えます。

ASPBとしては、今回の会議を踏まえた支援方針を今後3カ年の中期計画に反映させるとともに、「子どもにとって」という視点での現地調査を、何らかの形で実施したいと考えています。

ラオスを語ろう～活動交流会

2000年12月29日／駒場留学生会館

日本で学ぶラオス人留学生、ASP Bのボランティアや支援者のみなさん、会議のために来日したラオス事務所スタッフなど、総勢50人ほどが集い、交流会を行いました。ラオスの若者と直接お話がしたい、とASP B顧問で絵本作家の長野ヒデ子さん、同じく紙芝居作家のやべみつのりさんも参加されました。

まずASP B現地コーディネーターのドゥアンドゥアンさんが、スライドを使ってラオスの教育事情を解説。ラオス事務所長のソンペットさんが現地活動について話しました。会場では図書袋や紙芝居、ASP Bがラオスで出版した絵本などを展示。留学生特製ラオス風サラダも大好評でした。

●「わたしの学校には図書箱があった」

事務局長の森が留学生に問いかけました。「この図書袋や図書箱を見たことがある人はいませんか？（手が上がる）あ、知ってる？」留学生「小学校の時ありました。」

「中から本を出して読んだことがありますか？」留学生「ありますよ。」

「ほんと？ありがとうございます。（笑い）」

ASP Bが図書箱の配付を始めてから約10年。ラオスの小学校で図書箱に出会い本を手にした人と、日本で出会う…感激の一瞬でした。

●紙芝居との出会い

ソンペットさんがラオスの紙芝居「さかなのおんがえし」を熱演。ラオスの子どもたちに負けないくらい会場も盛り上がりました。この日初めて紙芝居を見たという留学生も多く、みんな興味をもった様子。「自分でつくってみたい」という声もあがり、やべさんから留学生に『ラオスのかみしばい』のプレゼントが。「ぜひラオスで小さな後輩たちに実演してあげて」と目を細めるやべさんでした。

最後に事務局長の森からひとこと。「留学生とかけてNGOと解く。そのころは、どちらも2つの国にふるさどがあります。」

現地スタッフの報告から 通訳：ケオラ／テープ起こし協力：野田幸枝

学校の建物より、教材と先生が大事

お話：ドゥアンドゥアン プンヤヴォン

今日お集まりのみなさんの中には、ラオスからの留学生も含めて、ラオスの教育の現状がどうなっているか、よく知らない人もたくさんいらっしゃると思います。教育はとても大切です。「ASP Bラオスの子どもに絵本を送る会」はボランティアに支えられているNGOの団体ですが、ラオスの教育に対していろんな大切な活動を行ってきました。留学生のみなさんも将来ラオスに帰って、ぜひ教育に貢献してほしいと思います。

ラオス政府も教育をよくしようと全力でやっていると思いますが、その中で、私たちにも貢献できる余地がたくさんあると思います。まず

そのことを理解してもらいたいと思います。

私たちが何故こういうプロジェクトを始めたか。これからお話するのは初等教育について、つまり6歳から12歳の子どものための教育についてです。

●ラオスの初等教育

ラオスの義務教育は5年間です。全ての子ども



ドゥアンドゥアンさん
イラスト：やべみつのり

もたちに、まず5年間は勉強してほしいということです。しかし実際は、みんながみんな5年間勉強しているわけではありません。ラオスの人口は現在約500万人ですが、幼稚園から中学校までの人口は、全人口の40%くらいです。幼稚園はラオスではまだ普及している制度ではないので、ここでは幼稚園の話はしません。

ラオスの小学校の数は約8,000校くらいです。しかし、その中でちゃんとした屋根と壁があった机、イスがあるのは5,000校くらいです。この数は5年生までである学校ということです。残りは、例えば1年生だけとか2年生まで、といった分校です。分校は特に農村や遠隔地……山岳地帯など、少数民族が生活しているような所にあります。

そういう所では、文化的に子どもを学校に行かせたくないということがあって、特に女の子は5年生まで行かずに、2年生とか3年生までしか通わないというのが一般的です。

●いろいろな校舎（スライドを見ながら）

(1) トタン葺き屋根の学校。雨が降るとうるさくて勉強できないです。

(2) 国際機関や日本の援助で建てられた校舎。政府は外国からたくさんお金を借りて学校を建設しています。

(3) 壁のない校舎。1年生か2年生までの分校です。大雨が降ると土間に水が流れ込んで、勉強できなくなります。

(4) 2人用の机を4人で使っている教室。子どもが多くて机の数が足りないのです。クラス50人とか70人というところもあります。

(5) 少年僧も共に学ぶ教室。小学校によってはお寺の中にある場合もあります。

学校の状況、おもに建物の状況を話しましたが、私たちがいま協力しているのは、建物ではなく教育の内容です。子どもが読む本や雑誌などを寄付しています。

●建物と、建物以外のもの

みなさんの中で建築を勉強している留学生はいますか。(手が上がる)ラオスでぜひ学校を建ててください。外国人はラオスの学校を見て「鶏

小屋」とよく言いますが、教育には場所が必要です。校舎を作ったりしなくてはなりません。しかし建物だけではなくて、本とか先生が必要です。確かに建物も大事ですが、それ以上に大切なのは教材と先生たちです。

しかし農村では、人々はきれいな建物がほしいと言う。実はラオス政府もアジア開発銀行と世界銀行からお金をたくさん借りて、校舎をたくさん建てています。それによって建物という問題は解決されると思いますが、でもそこから先は教育の内容のことが問題になってきます。

●ラオスの本

農村の子どもたちは、たぶんこのような本(ASP Bがラオスで出版した絵本を示して)を見たことがないと思います。みなさんは、小学生のときに、教科書以外に本を読んだことがありますか。(手が上がる)どこですか?

留学生「パクセーです。」

どんな本でしたか。

留学生「…物語の本でした。」

たぶん私たちが作ったものでしょう。10年間やっていますから。

ユネスコの調査では、ラオスは教科書以外の本が一番少ない国だそうです。そして、ラオスの子どもたちはラオスの言葉が十分に読めないという現状があります。

問題はラオス語の本を読む習慣をつけることです。そうしないと他の言葉の本を読むこともたぶん出来ないでしょう。今でも読書の好きなラオス人は少ないと思います。おもしろい作者がそれほどいないことも原因かもしれません。

子どもにとって本を読むことはとても大切です。読書によって子どもの考え方が広がります。ですから、きれいな本を作って、まず子どもたちに本を読むことを好きになってほしいのです。

ラオスは200年間も外国の植民地というか、属国になっていました。外国人が入ってきたときは現地の文化を弾圧し自分の言葉を押しつけます。タイの時も、フランスの時もそうでした。そういう問題もありましたが、戦争は終わり、今年で25年になります。これからは、これまで

に失ったものを取り返していかなければなりません。

●街の学校、村の学校。

質問：ヴィエンチャンと地方の格差はかなり大きいのですか。

ドゥアンドゥアン（以下DD）：都市部と農村部とでは、まず校舎が違います。また農村では生徒の数がそれ程多くありません。先生の質も都市部に比べあまり高いとはいえません。例えば場所によっては1人の先生が3学年を担当する場合もあります。それから農村部では休校が多いですね。

●小学校の時間割

質問：5年間の義務教育では、どんな教科を勉強するのでしょうか。

DD：小学校の教科は、実は最近改善が行われました。どんな教科を勉強するのか、ソンペットさんに答えてもらいましょう。

ソンペット：算数、ラオス語、理科、身の周りのこと、一般知識のようなものですね。

森：日本の『生活科』みたいな、社会と理科が一緒になったような科目かな。小野さんにも補足してもらいましょう。彼は日本の小学校の先生ですが、1年間ヴィエンチャンの学校で、先生たちと教材研究などの活動をしていました。

小野：今出た科目の他に、英語と、時間割の上では体育とか音楽も一応あるんですが、先生たちも勉強したことがないので、教え方がわからない人が多いですね。指導書を見ながら教えているようです。先生はもっと教え方を勉強した

いのだけども、そういう機会は与えられていないのです。

DD：ありがとう。そうですね、それに教材も足りないですね。

●学校建設に賛成できない？

質問：ラオスにおいて世界銀行とアジア開発銀行が学校建設の教育事業をやっているが、賛成できない、というお話があったと思います。これはどうしてなのでしょう。例えば、ラオスは重債務貧困国のひとつになっていますが、これ以上債務を重ねることを含めて賛成できない、という趣旨ですか。

ケオラ（通訳）：ちょっと僕の訳が適当でなかったようです。賛成できないということではなくて、お金を借りるということ自体が問題なのではなく、建物だけではなくて、違う面にも使ってほしいということです。

森：例えば、教員養成学校を世界銀行とかのお金でつくるわけですが、すごく立派な図書館があります。そこを訪ねたことがありますが、先生は、図書館はできたけれども本は一冊も入れてくれなかったから、本がほしい、と言うんですよね。

DD：例えば、ヴィエンチャンに学校ができました。すごく美しい建物です。トイレも8つできました。しかし建物以外のもの、水道などがよくなくて、3ヶ月後にはトイレが詰まって使えなくなってしまった。維持管理も大変です。

●学校にトイレがない。みんなどうしてるの？

質問：そういえば、どうしてラオスの学校には便所がないのですか。（留学生に）みんな学校に行っているときはどうしてたの？便所がない学校に行ってた人はどれくらいいますか？

留学生A「僕の学校はなかったです。」

留学生B「ありました。」

留学生C「私は学校と家が近かったので、休み時間15分くらいで長いですから、トイレの時は家に帰ったり、他の友だちの家に行ったりしていました。」

DD：農村などでは家に帰らなくてもそのへんで、畑とかですということもありますね。

50人余りの参加者がお話に聞き入った。



本を読むことを好きになってほしい

お話：ソンペット ポンパチャン

まず第一に、ラオスの人に本を読むことを好きになってほしい。そのためにいろんな活動を行ってきました。

例えば私たちはあそこにあるような図書袋や図書箱を小学校に配ってきました。小学校は8000校くらいありますが、国立図書館全体で、今までの実績は大体6000校くらいです。私たちはその内の1300の小学校に配ってきました。配った本の7割は絵本で、残りの2~3割は大人のための法律とか農業関係の本、宗教、一般知識。ラオスで手に入る本をかき集める感じです。

2つ目のプロジェクトは、学校に図書室を作る活動です。もちろん図書箱・袋より図書室の方が本は多いです。子どもたちみんながそこで本を読むことができます。図書箱・袋は、どちらかというといく遠い所に届けるようにしています。例えば、先生が2日間歩いて取りに来た、という話もありました。

3つ目のプロジェクトは本の印刷、出版です。私は、本を作ることはラオスにとって大変意義のあることだと思っています。国立図書館の集計では、ラオスでこれまでに作られた子どもの本は150種類となっています。150という数は決して多い数ではありません。子どもたちが本を読む興味を失わないためには、新しいものをどんどん作っていかねばなりません。

日本には子どもの本がいっぱいあります。そしてここには留学生がたくさん来ていますね。みなさんが卒業してラオスに帰ったら、ぜひボランティアで翻訳をしてほしいです。そうするとラオスの子どもたちも読むものが増えます。

私自身も今日本語を勉強していますが、まあできれば中心になって翻訳をしたいと思います。でも日本語は難しいですね。

4つ目は「子ども文化センター（CCC）」の支援です。ラオスの子どもは、まず本というものがどういうものなのか、ということがわからないことも多く、すぐに本に親しむということが難しいと思います。例えば男の子だったらサ

ッカーをした方が楽しいという子どもたちもたくさんいます。CCCでは、たくさんの子どもがやってくる、いろんな遊びをしたりして、その中で本に対する興味をもってもらおうということですね。



ソンペットさん
イラスト：やべみつとり

5つ目のプロジェクトは研修、人材育成です。いろいろな研修があります。図書箱をただ配るだけでは、受け取った先生は何をすればいいのかわかりません。ですから渡す時に図書箱を使って学校で何をすればいいのかと言うことを伝えます。ほかに紙芝居づくりの研修もあります。ラオスの子どもたちは本当に紙芝居が好きで、大人気です。絵がきれいで大きいので、子どもは非常に興味を示します。しかしラオス語の紙芝居はまだそれほど作られていません。

絵本づくりの研修もします。例えばこの本は、研修に参加した人たちが一緒になって作ったものです。これも私たちの成果です。

5つのプロジェクトについて簡単に申し上げました。私たちが今回来日したのは、このプロジェクトの中で、どれを進めていくべきか、あと新しい可能性も考えて、これからのことを話し合うためです。

最後にこれだけは申し上げておきたいことがあります。ラオスに学校図書館があるのは71カ所で、その中で私たちが支援して開設しているのは50カ所です。割合で見ると私たちはたくさんやったということになるかもしれませんが、しかし何千という学校の中で71校しか図書室が無いというのは少なすぎます。

ここにいる日本人の方々はボランティアのみなさん、支援者のみなさんだと思いますが、ご支援に感謝しています。これからもぜひ私たちに協力していただきたい、一緒にやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

日本の正月、会議日和。

今年の正月の2日と3日、これからの活動づくりに向けて東京事務所で会議を行いました。参加者は、東京の事務局スタッフ、ヴィエンチャン事務所から2人、紙芝居・美術教育など専門家の立場からの協力者、ボランティアの有志（ボランティアと有志は同義語でしょうか。ふだんボランティアとして参加していて、その日の会議に出席を申し出た人という意味です）。これまで、活動方針は東京の事務局で決めて、それをラオスに伝えるというやり方をしてきましたが、方針決定にラオスのスタッフが参加してこなかったのはおかしいということに気がつき、今回、実施に至りました。話し合われたことのいくつかを紹介します。

■出版

ASPBは、これまで昔話や創作絵本などの新刊、既存の本の再版などを手がけてきた。ラオス人による作品というこだわりを持って作品づくりのセミナーなどをやってきた。しかし出版点数も、質の面でもまだまだ不十分。この現状にラオス・スタッフの意見は、「セミナーを繰り返しやってきたが、3-4日程度の単発でなかなか成果もない。やるならもっと継続的にすべき。当面は外国のいい作品の翻訳にも力を入れるべき」。また、ラオスのASPBに出版委員会を設け、これまで作品づくりに関わってきた人々などで出版計画と編集機能を持たせていくこととした。編集者の日本での研修の必要も話し合われた。また、「作品づくりを志望する人々などが様々な出版物や美術作品集にふれられるように、ASPBに揃えていこう」というアイデアも出た。

■紙芝居

紙芝居づくりの取り組みも繰り返し行われてきた。少しずつ浸透しているが、作品が増えているとはいえない。ラオスで紙芝居の推進者となる人物は、まだ登場していないのである。そこで、ひとつの方向性として、先生の手づくり教材など教育メディアとしての活用を働きかけることをめざすこととした。さらに、アイスクリーム売りのおじさんに「紙芝居をやってみたい？」と呼びかけてみる、とのアイデアも。

■読書推進

ハックアーン（学校図書室）、図書箱、図書袋など、学校に置かれた本が活用されるための担い手は先生。従来は、本を届けた時点で先生に研修を行ってきた。今や教員養成学校とのつなが

りもできたので、これからは先生の卵たちへの研修にも力を入れることを確認した。また、各学校の授業を指導するスーパーバイザー（教育監督官）が、図書室の指導もできるように、彼らの研修も行っていく。

■本の販売

公共のものとしての借りる本もある一方で、「私の大切な、この本」というものもある。むしろ本への思い入れは自分の本となってこそなのではないか。こんな考えから、本の販売の議論が出ている。そのアイデアはよし。ただ、ラオス政府から「NGOが商売をするとは何事か。営業停止！」とクレームが出ないように手筈を整えなければならない。まずは、本を買いたい人が買える場を作ること。本の販売で本の市場創造、流通整備、事業の自立を…という夢も。

■CCC

情操教育をキーワードにしてきた子ども文化センター。学校教育で行われない音楽、図画工作などを行ってきた。最近は、「子どもの居場所」であることが、CCCの役割として重要だという議論が出ている。理由は非行の増加、麻薬問題の深刻化だ。CCCの議論の中で、ラオスの子どもは家の手伝いなどがあって、あまり遊んでいないのではないかという話から、「子どもが子どもらしく居られる場としよう」と声が出た。すると、「子どもらしくとは、家の仕事をしないという意味か？それはラオスの現状に合わない見方だ」という声がラオス・スタッフから出た。造形の専門家からは、「情操教育と非行は背中合わせ。自分を表現する手立てを持つことが、非行に走らせないことにつながる」という意見が出た。（森透）

指定募金関連プロジェクトの報告 2000年2月～12月

「寄付のいろいろ」2000年版でご案内した「指定募金」に、たくさんのご支援をいただき、ありがとうございました。今年度は以下のように4つのプロジェクトを実施することができました。

「指定募金」は今年度も引き続き同じ内容で募集しています。ご支援よろしく申し上げます。

指定募金の募集状況

プロジェクト	のべ回数	寄付者・団体数
絵本印刷	81	22
子ども文化センター	30	21
図書袋	13	10
学校図書室	6	6

昨年度と比較して件数が倍増したプロジェクトも、逆に半減したものもあります。この背景にはいろいろな要因があると思いますが、今後もみなさまに快くご支援いただくために、活動に対して、また「指定募金」について、ご意見・ご感想をお寄せいただけましたら幸いです。

■絵本印刷 [1口1500円 募金総額121,500円]

計405冊分の印刷費に

昨年度分約430冊分と合わせ、「民話絵本」(コンクール優秀作品)の印刷に用いさせていただきます。現在以下の2作品の出版準備を進めており、このうち1作品の約835冊分の印刷を指定募金で行う予定です。

『働き者のトゥーノイヤー』5,000冊出版予定

『孤児と魔法のドラ』5,000冊出版予定

■子ども文化センター(CCC)

[1口10,000円 募金総額300,000円]

3センター、14講座の運営を支援

全国4か所のCCCの運営を支援しています。週末などに開かれる講座では、好きなことに一所懸命に取り組む子どもたちの姿が見られます。2000年度は支援講座数が前年度の2倍に増え、より多くの子もたちが多様な活動に参加できるようになりました。

支援講座と支援期間 (のべ募金者数)

- ・ヴィエンチャンCCC
 - 粘土 演劇 竹細工
 - 00年7-9月 (計3名)
- ・ルアンパバンCCC
 - 伝統楽器 機織り 図画 伝統舞踊 演劇
 - 00年7-12月 (計9名)
- ・サイヤブリCCC
 - 伝統楽器
 - 00年7月-01年6月 (1名)
 - 機織り 図画
 - 00年7-12月 (計4名)
 - 伝統舞踊 工作 体育
 - 00年7-01年3月 (計6名)

■図書袋 [1口15000円 募金総額195,000円]

13袋をヴィエンチャン特別市で配付

ヴィエンチャン全体で8校(16袋)に配付したうち、6.5校分が指定募金によるものです。図書袋には約70冊の本を詰め、中身の違う2袋を1組にして届けます。また先生を対象にセミナーを開き、図書の授業への活用、本の貸し出し、読み聞かせ、本の修理方法などを伝えています。

■学校図書室「Hak Arn」

[1口15万円 募金総額900,000円]

5校に開設、Hak Arnは計54か所に

指定募金6校分のうち2000年内に3つの地域の5校に新しく図書室を開設することができました。図書袋と同様、図書室を開設するときはセミナーを開きます。地域での理解や利用を進めるため、村の人にも参加してもらおうようにしています。

残る1校は2001年6月ごろまでに(ラオス夏休み前)開設の予定です。

Hak Arn No.	学校名	寄付者名(敬称略)
49	ノンボン小	若林地所
50	ナートーン小	村井浩
51	ティンニョン小	東京銀座ロータリークラブ
52	ヴィエンカム小	東京海上火災保険
53	ヒンブン中高	豊島福祉基金

小=小学校、中高=中学高校一貫校(6年制)
No.49はヴィエンチャン特別市、No.50~52は
ヴィエンチャン県、No.53はカンムワン県

東京事務所の動き

■2000年12月

- 1日 イベント「衣をとおしてアジアっちゃおう！」に参加
- 3日 アジア女性・人権特別賞 授賞式
チャンタソンが記念講演
- 5日 運営会議
- 7日～21日 赤井ラオス出張
読書推進運動評価会議の事前確認
- 10日 運営会議
- 14日 「ラオスのこども通信」19号発送
- 14～21日 チャンタソン ラオス出張
読書推進運動評価会議出席
- 19日 教育支援NGOネットワーク学習会
- 28日 事務所大掃除／仕事納め
ラオスからスタッフが来日
- 29日 活動交流会

■2001年1月

- 2～4日 会議
- 5日 ラオス人スタッフが帰国

14日 運営会議

- 日曜勉強会「国際協力」講師：森千也さん
- 20～21日 イベント「札幌NGO屋台村」に参加
- 24日 教育協力NGO連絡会設立会 森が出席
- 27日 やべみつのりさんと紙芝居支援について
打ち合わせ

■2001年2月

- 3～4日 地球市民フェスタ
- 7日 外務省「NGO活動環境整備支援事業」
NGO研究会 森が出席
- 9日 東京郵政局「NGO懇話会」赤井が出席
- 11日 運営会議
- 21～26日 チャンタソン タイ・ラオス出張
IFLA（国際図書館協会連盟）
ワークショップ「インドシナにおける移動
図書活動」でラオスへの支援活動を報告
- 24日 東京事務所業務監査委員会/
ピーマイパーティー実行委員会

イベント報告（2000年12月～2001年2月）

●「衣を通してアジアっちゃおう！」民族衣装でファッションショー 12月1日／東京ボランティア・市民活動センター

5企業の社会貢献担当者の集まり「ぼたんの会」が、民族衣装を通して社員に国際協力の興味を持ってもらおうと開催。40人ほどが参加し、衣装を着ての記念撮影などを楽しみました。

シャプラニール（バングラデシュ）、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（フィリピンとベトナム）、ASPBが衣装を提供。ラオスのラオ族、モン族、ヤオ族などの衣装は「超かわいい〜！」と大好評でした。[物品売上10,500円/記帳2名]

●「NGOとこんにちは！NGO屋台村」

（財）札幌国際プラザ主催 1月20日～21日／札幌市生涯学習総合センターちえりあ

地元ボランティアと2名で、活動紹介や手工芸品の販売を行いました。私の出身地、北海道でのNGOの認知度は、東京ほどではありませんが、会の活動に賛同してくださる方との新しい出会いがあり、とても楽しく意義のあるイベントでした。今後もラオスの子どもたちのため、そして自分の人生経験をより豊かにするためにも、できることをやっていきたいと考えています。札幌のみなさん、ポッカンマ

イ！（ラオス語で「また会いましょう」）（ボランティア：工藤政則）[物品売上42,200円/記帳24名]

●「地球市民フェスタ 2001」

2月3日～4日／東京国際フォーラム

活動紹介と出会いのコーナー「NGO広場」に出展。私がこれまでに参加したイベントに比べると小規模でしたが、その分お客さんとお話ししたり、他の団体のブースを見てまわる余裕があり、いつもとは違った楽しみを発見しました。会場を歩いていると、スタッフから借りたシン（ラオスのスカート）を誉められました。次回はぜひ自前のシンで参加したいです。（ボランティア：長田祐佳）

[物品売上27,250円/寄付1,785円/記帳21名]

お知らせ

●ラオスのお正月パーティー

「サバイディーピーマイパーティー」

日時：4月22日（日）午後1時30分～4時
（受付は1時から）

会場：東京ガス南部支店 大田ビル
京浜急行「京急蒲田」駅徒歩1分
JR「蒲田」駅徒歩10分

参加費：一般4000円（寄付金1000円を含む）

大高生2500円／中学生以下無料

申込：事前に事務局までお申し込みください。

協力：東京ガス南部支店

本格ラオス料理、留学生が語るラオス、絵本の展示や活動報告、染織工芸品の販売など。ぜひご参加ください。

<パーティーボランティア募集>

ラオス料理の手伝いや会場装飾など、パーティーを2倍楽しめます。お申込はお早めに！

4月21日（土）午後

4月22日（日）午前9時30分から午後6時

事前登録者に限り、パーティー参加費の割引有。詳しくは事務局（小川・赤井）まで。

TEL/FAX：03-3755-1603

e-mail：QWT03247@nifty.ne.jp

●2001年度総会

日時：5月26日（土）午後1時30分～5時

場所：ライフコミュニティ西馬込

運営に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。事前にお電話でご連絡ください。

●地球ひろば「もっと知ろうラオス」（富山県）

ASPB代表のチャンタソンが、活動のこと、ラオスの子どもと教育などについてお話する予定です。

日時：6月17日（日）午前10時から

場所：富山国際付属高等学校（富山市）

参加費：無料／申込：当日自由参加

主催：青年海外協力隊 富山県OB会

問合：もっと知ろうラオスの会（代表 室井雅人）

TEL/FAX：076-466-3664

東京事務所から

●本のバザーでラオスの絵本を支援

読み終えた本の社内バザー収益により、活動へのご寄付をいただきました。

キヤノン社会・文化支援室より

「チャリティブックフェア」（本・CDの社内バザー）収益金と会社からのマッチングギフトをご寄付いただきました。ありがとうございます。ご支援は今年で4年目。97年からこれまでに4種類の絵本を出版、4校に図書室を開設しました。昨年は担当の宮崎さんの現地視察も実現し、社内報告会などを通じてラオスの教育支援への関心が高まっているそうです。

高島屋本社社会貢献室より

「チャリティーブックフェア」の収益金と寄付金を「社員の善意を活動資金として有効活用して」とお送りいただきました。ご支援は昨年が続いて2回目。ラオスでの絵本出版などの活動資金として、大切に活用させていただきます。ありがとうございました。



高島屋「チャリティーブックフェア」の様子

●絵本2000冊運動、950冊がラオスへ

絵本にラオス語翻訳を貼り、2000冊をラオスに送ろう、と始まったこの運動。1999年1月からこれまでに、のべ約60組、総計600人ものみなさんのご協力で、翻訳貼付絵本や英語の絵本など約950冊をラオスに送ることができました。ありがとうございました。これらは、学校図書室や子ども文化センター図書室で、たくさん子どもたちに楽しまれています。

絵本2000冊運動はこれからも続けていきます。指定絵本を集め「あなたの手で、あの子の手に」ラオス語絵本を送りませんか？詳しくは同封の絵本リスト（改訂版）をご覧ください。

みなさま

昨年12月、私が「アジア女性・人権特別賞」を受賞したことを「通信」19号でご報告しましたら、温かいお祝いのごことばと励ましのメッセージをたくさん頂戴しました。この賞は、活動を支えてくださっている、みなさまと共にいただいたものです。受賞を多くの方と分かち合うことができ、大変うれしく思っております。この場を借りて、あらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。そして、これからも力を合わせていきましょう。

代表 チャンタソン インタヴォン